

平成29年3月 / 日

あきる野市議会議長 殿

会 派 名 明るい未来を創る会

代表者 合川哲夫

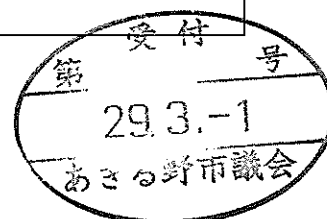


会派の（ 調査研究 ・ 研修 ） 報告書

このことについて、下記のとおり実施したので報告します。

記

1 調査研究または 研修実施日	平成 29 年 2 月 7 日（火）～ 8 日（水）
2 調査研究または 研修の場所	7 日－福島県南相馬市 （別紙 1～2）
	8 日－石巻市大川小学校他 （別紙 3～4）
3 調査研究事項 または研修名	東日本大震災及び原子力災害からの復興状況等について
4 参加者氏名 （ 2 名）	合川哲夫、清水晃、野村正夫、中村のりひと
5 調査研究または 研修の概要及び 感想等	別紙のとおり



(別紙2)

【概 要】

まず庁舎内で

「東日本大震災のその後 南相馬市の現況と復興に向けた課題」の説明を受けた。
災害当時の状況や、その後の人口の変遷等を丁寧に説明していただき、現況と課題が理解できた。

その上で、

復興のための「南相馬市復興関連事業」について42ページに及ぶ21の項目を一つ一つ丁寧に説明いただいた。

防災集団移転促進事業、災害公営整備、大町地域商業施設整備、ほ場整備事業（土地改良事業）、真野川漁港整備、工業団地整備、園芸施設整備、再生エネルギー基地整備、スマートコミュニティの構築、公共施設再生可能エネルギー等導入事業、防潮堤・海岸防災林、県道・市道、長期避難者生活拠点（県営災害公営住宅）、八木沢トンネル、萱浜地区研究調査関連施設、北泉海浜総合公園、パークゴルフ場、脳卒中センター、小高区市街地整備事業、宅地造成事業、消防・防災センター、主な完了事業。

説明終了後は、車で様々な被災地を訪れて、都度説明を受けた。

【感想等】

結論、抱える根本的な自治体の課題は一緒。

南相馬の場合は「放射能」の被害によって課題が一気に何十年も前倒しに来たと思う。
あきる野市が東西に広い面積を持つ中で、住民サービスを平等にするには財源負担が大きい。同じように、南相馬市も原発20キロ圏内に住む人をもっと離れて住む人にも同じように行政サービスを行うことへの財政負担をどうするか。

少子高齢化も原発事故によって加速した南相馬市。ロボットのまちを標榜し、今後どうなっていくのか興味深く注視していきたい。

(別紙 1)



南相馬市役所玄関前にて



説明を受ける会派メンバー



被災地に立つ慰霊碑

(別紙 3)

石巻市の視察では、「一般社団法人BIGUP（ビッグアップ）」の代表原田様にお世話を戴き石巻市の被災状況と復興の進捗状況の一例の復興住宅を市建設部住宅管理係の斎藤雄太主事および渡辺様のお二人に案内いただき、共同住宅形式の住宅で、個室の見学はできなかったが、集会室の中を見せて頂いた。

集会のときは 30 名くらいの入室は可能なくらいの広さがあり、入居者のコミュニティには充分と思われるが、昔からのつながりを戻せるか、どうかは、わからない。これからが課題ではないかと思った。

石巻市立大川小学校には想像を絶する巨大な津波の悲しい痕跡がある。全校児童数 108 名の内 74 名が死亡、あるいは行方不明、教員も 10 名が亡くなった。

今回の視察に、ご遺族の佐藤和隆氏の説明を受けた。佐藤氏は遺族代表として県教育委員会に対し訴訟を起こしている。

仕事も精力的にこなしている傍ら、大川小学校に慰霊に訪れる人々に、教師の誤った判断が多く犠牲者を出してしまったことに積年の念を抱きながら説明をしている。

震度 6 強の強い揺れが 3 分間も続き、津波警報が発令され、避難を呼びかけたが何故か学校側は校庭に集合させ、待機させています。

指定の避難場所はあったがそこにも避難をさせる指示なかったようだが、その高台を津波は遥かに乗り越えていている。

校庭で待機している間に津波は北上川を 4km も遡り、堤防を越えて津波は大川小学校に流れこんでくる。地震発生から 51 分、警報発令から 45 分の時間があつたが、保護者が迎えに来た児は助かり、子供達から「先生山へ逃げよう」と声を出す子もいたが、教頭の指示は出ない、現場にいた先生方もただ黙っていたのか、そのうちに津波の勢いは増し、ついに前述のように子供たちの尊い命は飲み込まれてしまった。

学校管理下で過去最大の犠牲者を出したしまった事実の検証、伝承の方向性、そして想いを多くの人と共有する目的で作られた「小さな命の意味を考える会」（任意団体）、同団体の活動に併せて、震災遺構となった大川小学校をどう遺すかは、遺族や関係者が静かに祈れる場所を訪れた方々が、自分は今からどうして行けば、あるいは生きて行けばいいのだろうか、と考えてくれるような環境整備に十分な配慮が望まれる。と思った。

以上

東日本大震災 2011.3.11 大川小学校被災地視察

平成 29.2.8



現場入り口には慰霊碑が建っている。



慰霊碑の傍に津波にのまれた子供たちの身代わりでしょうか。寒さ除けを着ていたお地蔵さん。



米国人建築家レイモンド氏に師事した。北沢興一氏の設計、箱型校舎とは違ったユニークなデザイン。子供たちは多いに喜んだ（北沢談）そうだ。



体育館への渡り廊下、柱が津波に押され折れている。



渡り廊下の円柱、強固なコンクリート柱に出来ている。津波の圧倒的圧力が柱と屋根にかかり鉄筋が切断されている。



上記と同じ



前ページと同じ





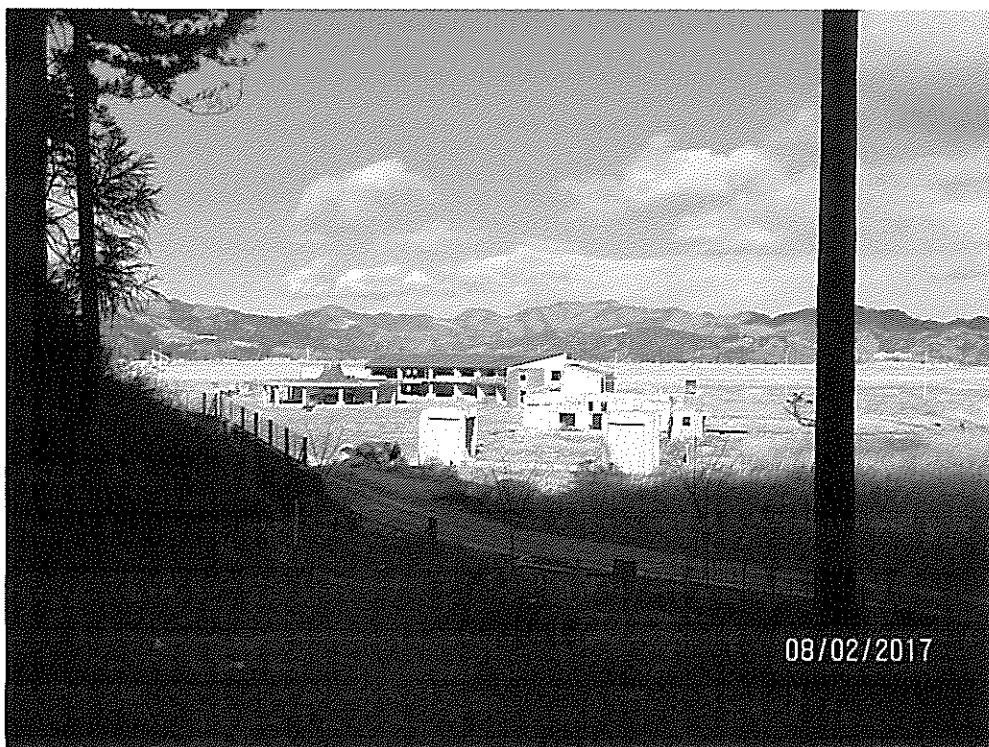
津波の深さグラウンドレベルより 9 ～ 1 0 m はあると思われる



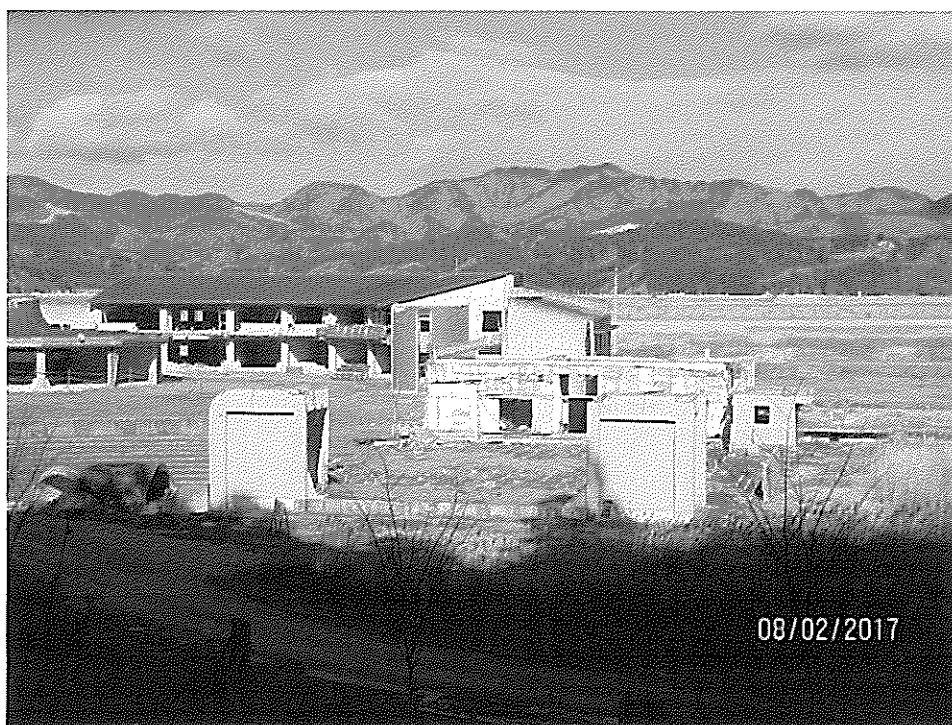
子供たちが普段の課外授業でシイタケを栽培していた校庭前の山。津波が来るまで 5 0 分もあった。その間、子供たちは先生の指示をひたすら待った。いくらでも避難できた。先頭に行く人の左肩付近の白い印は津波の高さを示す。



説明をして戴いたご遺族の佐藤和隆さん。熱心に耳を傾ける中村議員



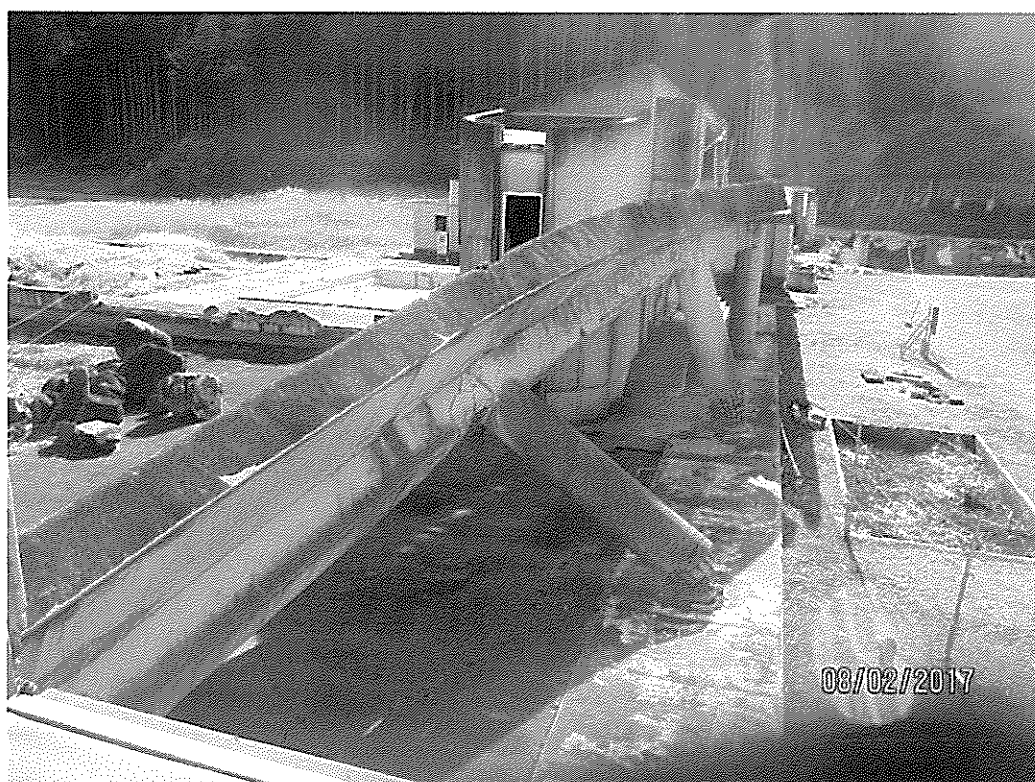
大川小学校前景（南方向より）シイタケ栽培の箇所。校庭より80m程度



校舎全景道路の向こう側に堤防があり広く大きな北上川悠然と流れている。



前述の円柱の切断面コンクリートが内部によく充填されており表面の打ち放しコンクリートもきれいに仕上がっていた。



校舎2階より渡り廊下を見る。遠方はシイタケ栽培をした杉山



2階教室 斜め天井の中間位置まで津波のシミが残されている。高さ3,0m以上はある。



隣の2階教室、野村議員の身長と比較するとこちらは4.0mくらいある模様。



バルコニーより校庭を見る、中央やや右に慰霊塔、墓碑が策に囲まれてある。ここは撮影禁止



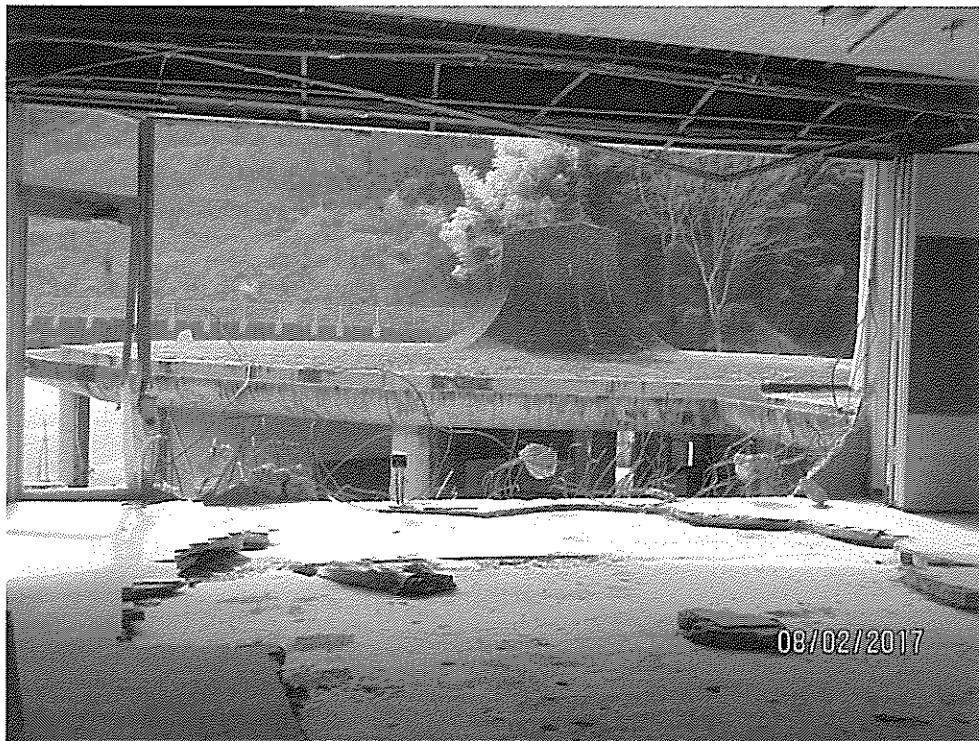
2階教室床、仕上げ下地が剥がされている



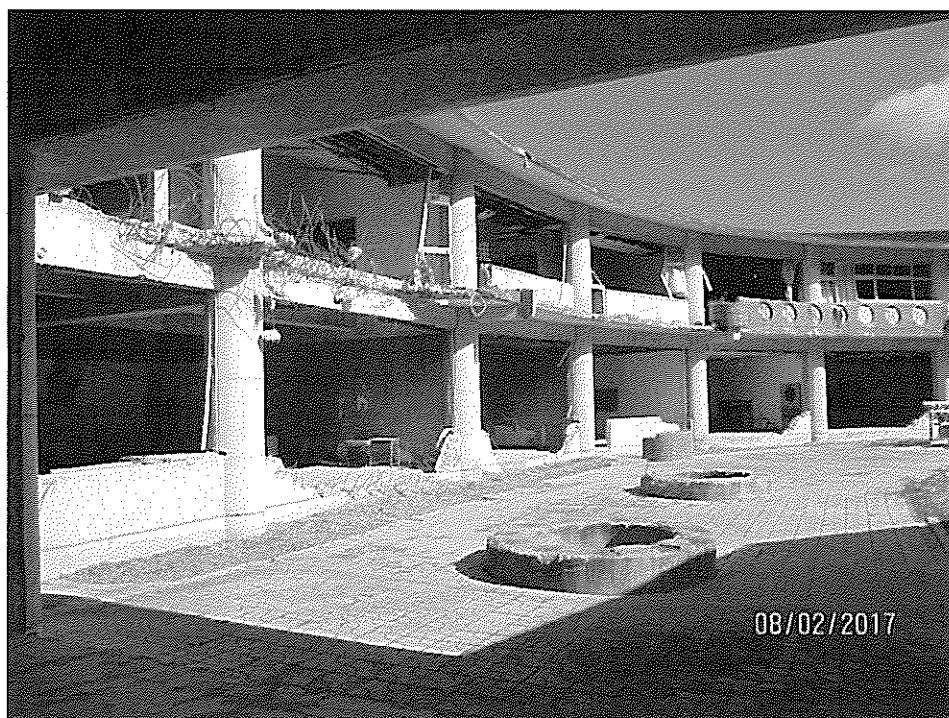
2階の教室津波レベル。やはり3.0m程度でしょうか？



この2階教室ではコンクリートスラブも一部破壊されている。



ここの2階教室のバルコニーのコンクリート手摺は完全に破壊されている。



そのバルコニーを外部より見る、残っている手摺も見える。



会派メンバーとご遺族の佐藤和隆氏